

船舶事故調査報告書

平成24年4月26日
 運輸安全委員会（海事専門部会）議決
 委員 横山 鐵 男（部会長）
 委員 庄 司 邦 昭
 委員 根 本 美 奈

事故種類	乗組員負傷
発生日時	平成23年9月2日 11時15分ごろ
発生場所	愛知県名古屋港 名古屋港北信号所から真方位146°850m付近 （概位 北緯35°05.0′ 東経136°53.2′）
事故調査の経過	平成23年10月17日、本事故の調査を担当する主管調査官（横浜事務所）ほか1人の地方事故調査官を指名した。 原因関係者から意見聴取を行った。
事実情報 船種船名、総トン数 船舶番号、船舶所有者等 L×B×D、船質 機関、出力、進水等	貨物船 ^{かいほう} 海宝丸、498トン 141011、大宝海運有限公司 75.97m×12.00m×7.17m、鋼 ディーゼル機関、735kW、平成21年3月
乗組員等に関する情報	船長 男性 45歳 五級海技士（航海） 免許年月日 平成7年11月24日 免状交付年月日 平成22年10月21日 免状有効期間満了日 平成27年11月23日 二等航海士 男性 67歳 四級海技士（航海） 免許年月日 昭和45年1月9日 免状交付年月日 平成20年6月13日 免状有効期間満了日 平成26年4月12日
死傷者等	負傷 1人（二等航海士）
損傷	なし
事故の経過	本船は、船長及び二等航海士ほか2人が乗り組み、空船で名古屋港昭和ふ頭西方沖で錨泊中、乗組員4人で船倉内の側壁の塗装作業を始めた。 乗組員は、船倉の高さが約6.71mあるため、倉底から長柄ローラーで右舷、左舷、船首の側壁を高さ約3mのところまで塗り終えたのち、フォークリフトにパレットを取り付けて高さ約3mに持ち上げ、その上に乗った二等航海士ほか1人が側壁上部を塗り始めた。 船長は、フォークリフトを運転して右舷、左舷と塗り終え、さらに、船首側に移動して中央部にフォークリフトを横付けし、前進して右舷端まで塗り終えた。 船長は、乗組員に左舷側に移動すると声をかけてフォークリフトを少し後ろに下げ、徐行で前進しながら右にハンドルを大きく切ったところ、

	<p>フォークリフトが停止した。</p> <p>船長は、アクセルを踏んで前進を始めたが、フォークリフトに少し動揺があり、平成23年9月2日11時15分ごろパレットの上でハンドレールのない前方にいた二等航海士が転落した。</p> <p>船長は、救急車を要請し、錨を揚げ、名古屋港潮見ふ頭に着岸させた。</p> <p>二等航海士は、病院へ搬送され、骨盤骨折、腰椎多発横突起骨折、肋骨骨折、外傷性血気胸及び脳挫傷と診断された。</p>	
気象・海象	<p>気象：天気 曇り、風向 南、風力 4、気温 約29.2℃</p> <p>海象：波高 約0.5m、潮汐 下げ潮の中央期</p>	
その他の事項	<p>本船には、四方をハンドレールで囲われたパレットがあったが、用具入れに使用しており、本事故当時、使用していたパレットには、ハンドレールが一方にしかなく、ハンドレールがある一方をフォークリフト側にしていた。</p> <p>パレットは、木製であり、横約3m、縦約2m、厚さ約20cmの大きさであった。</p> <p>二等航海士は、安全帽及び安全ベルトを着用していなかった。</p> <p>本船の船倉は、縦約40m、横約9.5m、深さ約6.71mの大きさであった。</p>	
分析	<p>乗組員等の関与</p> <p>船体・機関等の関与</p> <p>気象・海象の関与</p> <p>判明した事項の解析</p>	<p>あり</p> <p>なし</p> <p>なし</p> <p>本船は、名古屋港昭和ふ頭西方沖において錨泊し、船倉内でフォークリフトに取り付けたパレットを足場にして高所の塗装作業中、船長が右転中に停止したフォークリフトを前進させた際、フォークリフトが動揺したことから、パレット上にいた二等航海士が転落して負傷したことにより発生したものと考えられる。</p> <p>本船は、四方をハンドレールで囲われたパレットを使用していれば、本事故の発生を回避できた可能性があると考えられる。</p> <p>二等航海士は、安全ベルトを使用していれば、本事故の発生を回避できたものと考えられる。</p> <p>二等航海士は、安全帽を着用していれば、頭部の負傷を軽減できた可能性があると考えられる。</p>
原因	<p>本事故は、本船が、名古屋港昭和ふ頭西方沖において錨泊し、船倉内でフォークリフトに取り付けたパレットを足場にして高所の塗装作業中、船長が右転中に停止したフォークリフトを前進させた際、フォークリフトが動揺したため、パレット上にいた二等航海士が転落したことにより発生したものと考えられる。</p>	
参考	<p>今後の同種事故等の再発防止に役立つ事項として、次のことが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 四方にハンドレールが設置されたパレットを使用すること。 ・ 安全帽を着用して安全ベルトを使用すること。 	